



した。②あゆ釣りの釣果情報は湯沢、塩沢、六日町、浦佐、小出の各地区毎に組合員の投稿(写真も可)により発信できるようにし

た。この結果、①河川の情報には信濃川河川事務所のライブカメラにリンクさせ、いつでも河川の状況を確認できるようにしました。また、カメラの設置の無い所は、民生の安定のためにも設置くださるよう河川管理者に要望しま

した。③組合関係の各種申請書もダウンロード、プリントができるようにします。このホームページが釣り人のみならず、地域の皆様にも愛されるようにするため、更なる皆様方のご意見、ご提案をお待ちしています。ご覧になりたい方は、インターネットで「魚沼漁協」と検索してください。

ホームページを一新

◎組合の施設紹介◎

伊勢島さげ、ます採捕場兼あゆ中間育成場

魚沼市旧小出町に設置されているこの施設には、三つの建物が併設されています。その一つが、さげ、ます採捕場で、九月末から十一月上旬にかけて、さげ、ますの一括採捕、採卵を行います。二つ目はあゆの中間育成場一号楼です。六つの育成池のうち五つに、あゆの稚魚三十万尾、残りの一つは、かじか産卵槽、ふ化槽及び飼育槽が入っています。三つ目の二号楼には丸池が七面あり、あゆが五十万尾、両施設併せると八十万尾になります。

今回は主にあゆの中間育成についてご紹介します。

中間育成するあゆは五月頃に野積で天然遡上する稚魚を捕獲し、村上市にある施設で秋まで育てた親魚から産卵させた稚魚、おおむね一尾一・〇gを購入し育てます。あゆの飼育に最も重要な条件が水温で、これが八℃以下では死ぬ危険があるので、冬季の河川水



あゆの給餌作業

は使用せずに、一〇〇%地下水を使用しています。もちろん魚病の防止や水量、水質も考え併せてのことです。仕事の流れを説明すると、一月末から三月にかけて、およそ体重一・〇g、体長二・三〜三・五cmを漁協の搬送トラックで村上市から運びます。小さな稚魚は繊細であり、雪道の中、細心の注意が必要です。池入れ後は、毎日六回の給餌を行います。あゆは一年魚で、早く大きくなろうと食欲は旺盛ですから、不足しないよう、また与え過ぎないように魚の状態を毎日観察しながら育てています。池の汚れと餌の与え過ぎは、病気や体調不良の一番の原因であり毎日油断できません。

あゆは日中常に池の中を泳ぎまわり、池の水あかを舐めるので沈んだ糞だけの排出で、掃除は割合手がかかりません。水槽の中では水車を廻しています。これは地下水に酸素を取り込むことと、流水に慣れさせ、急流に負けない体力ある放流魚に育てたいとの思いからです。

このようにして、三〜四か月後には一gから七g程度に成長させます。放



かじかの採卵作業

流の適期は河川の水温が十二℃になる五月下旬頃、水温がこれより低いと川を下つたり、生育に支障が出るため、タイミングを凶るのも大切な事項です。この頃には寺泊野積からも時期を見計らったように、天然のあゆが遡上を始めます。魚沼漁協ではこの中間育成の稚あゆの他に寺泊野積産の天然あゆと琵琶湖産の遡上系あゆを放流し、組合員、遊漁者に長期間に亘り少しでも大型を、出来るだけ多く採っていたけるよう努力しています。またかじかの稚魚は、組合員の協力を得て四月中旬から五月初旬にかけて親魚を捕獲してもらい、この施設で自然産卵、受精をさせます。かじかのメスはおおむね二二〇個の卵を産みます。ふ化するまでに二十五日間、ふ化したばかりの稚魚は目に見えないくらい小さいですが食欲は旺盛で餌付けは難しくありません。放流サイズの一尾〇・〇三g、体長一・〇cmに成長するまで五十日間を要します。放流は稚魚の成長にあわせ、六月下旬から七月下旬にかけ、今年は一三三、〇〇〇尾余りを県内各地と当組合管内に放流しました。